

時のほうが多いようです。このことは昔の人も気づいていたようですが、最近の脳科学で、集中している時とは別の脳の働きだということがわかってきたそうです。

考えることをやめて、ぼんやりしてみる…すると、別の回路に切り替わって無意識のうちに「あれ」と「これ」が結びつく——それが「ひらめき」だそうです。

ぎゅーっと考えた後は場所を変えたり、利用者のみなさんとふれあったりすると、はっと思いつくことがあります。意味もなく歩き回っている時はそんな時です。



【利用者の皆さんとのふれあい/一緒に献立の確認】



映画『ヒゲの校長』を観て考えたこと

この映画をご覧になった方は多いと思います。i) ご覧になっていない方にはネタバレとなりますが…

「大正時代後期、欧米の影響を受けた日本のろう教育は手話・板書中心の教育方法から読話・発話による口話法への転換が迫られます。当時は聞こえない子どもに長時間、相手の口を読みとらせ、発話の訓練を強いることが推進されました。口話教育が広がりを見せるなか、大阪市立聾啞学校(現大阪府立中央聴覚支援学校)6代校長の高橋潔は、手話を排斥する口話教育に反対し、『手話が適する児童には手話による教育を、聴力がいかせる児童には口話法による教育を。彼らが会話で心を通い合わせるには手話を』用いる、いわゆる適性教育を提唱しました。その後、昭和に入り、口話法の見直しを図っていた米国で大曾根源助(同校教員)はヘレン・ケラーと会い、助言を受け、日本語のすべての文字を右手だけで表せる指文字を発案し、以後全国に普及することになります」というのが概要です。高橋校長が提唱した適性教育は、まさに現在の特別支援教育と通じるものがあります。教育者側が画一化されたメニューを提供するのではなく、個々人に合った教育メニュー、支援メニューを考え、提供しなければなりません。

またこの映画では口話法の訓練の是非が問われて

います。知的障がいのある人に対しても、発話の訓練をはじめ、自立生活のための訓練メニューが数多く用意されていますが、例えば危険認知が難しい人に公共交通機関を使って単独通園の訓練をしてもらうことは正しいか?議論のあるところですが、かといって、何の訓練要素もない日常生活は単調で退屈なものになるかもしれません。目標を掲げ、それに向かって邁進することはその人の生活を豊かさにすると思いますが、その目標があまりに現在の様子と乖離している場合は、過剰なストレスを生じさせ、問題行動を招くだけです。個別支援計画に掲げる目標もほど良いストレスを感じるものが適切ではないでしょうか?

それと、学者の方は得てして「これが正しくて、あれは間違っている」という二分化思考に陥ることが多いように思います。20年ほど前になりますが、自閉症の勉強のため、ABA(応用行動分析)のメッカと言われるカリフォルニア州の大学を訪れた時、TEACCHプログラムの欠点をあげつらう朝食会議に参加しました(不本意でしたが)。私が「ええとこ取りしたらええのに」というような発言をすると、周囲から猛反発を受けてしまいました。後から聞いたのですが、アメリカの大学は研究費獲得のためにも敵を打ちのめさないといけないそうです。つまり、ABA派としては、TEACCH派を排斥してこそ、数少ないパイが奪える、そういう構造を理解しないといけなかったようです(いわゆるABA対TEACCH論争です)。『ヒゲの校長』で争われた、ろう教育も同様で、個人に合わせて、口話、手話のええとこ取りをすべきだというのが高橋校長の真意です。現在の知的障がい児の療育では、発話の遅れている子どもに対し、ABAの手法で初語を促すことが多いようですが、私の周囲には幼児期に発話がなく、マカトン法を習得することで意思疎通を行い、10代後半になってペラペラ喋り出した人もいます。その人のケースで言えば、ABAの手法で指導していたら、このような言語発達が望めたか?想像できないところですが。

近年、療育手法は百花繚乱の印象もありますが、私たちにできる最善のことは、個々人にあった個別支援計画をいろんな観点から作成し、試行錯誤を繰り返して実践していく、これに尽きると思っています。

i) ご覧になっていない方は自主上映会が全国各地で開催されていますので、ご関心があればどうぞ。

(T. U.)

